

# 近世後期津山とその周辺の他所芝居興行

竹 下 喜 久 男

## はじめに

文政八年（一八二五）大坂の本屋安兵衛が伝聞した当時評判の芝居興行地を見立番付として板行した『諸国芝居繁栄数望』によれば、収載された三都を含む一三二か所のうち、上方以西は四分の三に近い数を占めている。伝聞が西国に偏していることを考慮しても、近世後期西国の各地で盛んに芝居が興行されていたことを窺わせる。しかしこれらのうち興行の実態が今日知りうるものは伊勢古市、安芸宮嶋、讃岐金毘羅などわずかで、大部分は断片的に知れるだけである。それに比して上方以东については地域毎にかなり実態を知りえて、その上に多くの注目すべき研究が蓄積されている。興行と藩の景気振興策の関わりに着目し、興行の社会史的意義を考察しようとする氏家幹人「地方都市興行の成立と背景―近世後期における芝居公許の論理―」（津田秀夫編『解体期の農村社会と支配』所収）は注目すべき論稿の一つである。氏は近世後期城下町経済が流通構造の変化により景気が沈滞し、これに窮迫領主による種々の収奪が強化され金融閉塞の状況になるとし、それに伴う城下町細民層の不穏な状況を鎮静し、景気の振起を期待して領主側の芝居興行政策が肯定的に転換すると指摘して、これを金沢の川上芝居を通して具体的に明らかにしよう

とした。氏がとりあげた川上芝居は六万人余の人口を擁する三都に次ぐ城下町において、町会所の主導により興行經營され、収益の一部は運上銀として藩が收納する常設芝居であり、このような興行形態は他に多くの例をみるものではない。地方都市興行について氏が提示した公許の論理を一般的都市における芝居興行に見出し得るかどうかを検討することは、芝居興行を社会的に位置付ける上で意義あることであろう。

作州津山藩の城下町津山は陰陽交通の結節点に位置して往來の盛んな町であるが、芝居興行について研究されたものを知らない。しかし近世後期には城下町の北約四キロメートルの美作国一宮中山神社において例年公許されて芝居が興行されていた。一宮においては地元芝居のみられるが、多くの観客の関心を惹いたのは大坂あるいは播磨など各地から呼ばれた他所芝居であった。他所芝居の興行は僅かな期間に城下町の人口に匹敵する観客を動員し、これが地域の商業振興に与える影響は少なくなかった。興行出願人はこれを「町の賑わい」として出願理由にしばしば用い、領主側もこれにさまざまな規制を加えながら、経済的效果と鬱積した町人の不満を一時的にせよ沈静できるとする心理的效果を評価し、一宮以外に興行を認めることもあった。

本稿においては津山藩の城下町とその周辺において近世後期興行された他所芝居の実態を明らかにし、とくに天保七年（一八三六）の芝居興行が興行出願人のどのような思惑によりすすめられ、藩がこれに如何に対応したかを具体的に明らかにし、興行のもつ社会的意味を考察したい。

## 興行の環境

近世津山藩は小早川秀秋の遺領のうち美作国一八万六、五〇〇石に慶長八年（一六〇三）森忠政が封じられたことに始まる。その後一世紀にわたり森氏の支配の下で、近世前期の藩政が展開し、元禄十年（一六九七）長成が病死し、養嗣子の発狂などの不幸に見舞われ除封の処分をうけ、その後翌十一年松平宣富（長矩）が美作に一〇万石を与えら

れ、近世後期の津山藩政を担うことになった。城下町津山は藩政が整えられるとともに政治的拠点としての重要性を増したことはいうまでもないが、因州、伯州、雲州、石州、隠州から播州姫路への往来が交叉する交通の要衝都市として重要な意味をもった。大手門外京橋口を起点として姫路に通じ山陽道に連絡する播磨道と出雲道は城下で結ばれている。出雲道は城下から西へ走り、小田中、二宮、院庄から久世、高田、美甘、新庄の各駅を経て国境四十曲峠を越え伯者に出て米子を経て松江に到る。松江藩主は参勤交代にこの往還を利用している。城下からはさらに南方備前に通じる西大寺道、小田中村新田で川を渡り弓削、福渡の駅を経て旭川を渡り備前に入り金川駅から岡山城下に達する岡山道がある。また北方因幡、伯者に向う主な二筋の道があった。因幡道は城東の林田付近で播磨道と分岐し関本駅を経て黒尾峠を越え因幡に入り、智頭駅を過ぎ鳥取城下に達する。伯者道は城北山北の八子町、小原、西一宮の中山神社前を通り香々美中村駅、奥津駅を経て国境人形峠を越えて伯者に入り倉吉駅に達する。以上の主要な六筋の往還に加えて水量の豊かな津山川（吉井川）の諸河川も備前と美作を結ぶ幹線交通路であった。

右のように津山が山陰、山陽各地を結ぶ交通の要衝であったことは当然城下町出入の人びとが多かったことを予想させる。事実城下に宿泊した延人員をみると文化十一年（一八一四）二万八、一七二人、天保元年（一八三〇）二万八、四九九人、同二年一万九、七二六人を数え、各年の町方人口の三倍から四倍強に達する宿泊人数のあったことが知れる。又三か月ないし六か月城下に宿泊して呉服類をはじめ多種の日常雑貨を卸売する商人が大坂をはじめ近江、丹波、播磨、備前、阿波の各地から入り込んでおり<sup>②</sup>、少なくとも近世後半期の津山城下周辺は領内はもとより他領の人びとの往来が活発な地域であったことが窺える。

交通上の恵まれた環境を基盤として津山城下とその周辺の芸能は展開していくが、先ず興行場所としてよく選ばれたところとして、城下宮脇町徳守神社、上之町大隅神社、二階町庚申堂、不動堂、石松院、戸川町妙願寺、伏見町本琳寺、周辺では一宮村中山神社、二宮村高野神社、西苦田村総社、さらに硯河原、追廻河原などの社寺、河原をあげ

ることができる。なかでも中山神社は藩から公許された興行場である。

美作国の一宮中山神社は数多くの社伝をもつ古社である。慶長九年（一六〇四）森忠政が入封直後社領として三〇石を寄進し、元禄初年までに六〇石の社領をもつにいたり、松平時代にも毎年祭祀料を寄進するなど、代々の藩主が一宮として崇敬の念を寄せた。他方例年四月の中の午の日に催されるお田植祭や末社の猿宮への信仰を通して周辺の庶民の生活と関わり、親しまれていた。末社猿宮は牛の守護神とされる猿を祀り、牧畜を営む周辺農民の信仰を集め、牛を牽いて参詣する風があった。美作、備中北部地方にみられる猿を守護神とする信仰は中国山地一帯が全国屈指の牛の放牧飼育地帯であることから、山の神に牛の安全と生育を祈願するため、直接には山の神の使令である猿を崇めたものであった。牛を牽いて参詣する風と神社の祭礼である田植祭が重なり、門前に祭礼の市が立つのと並行して牛馬の市が立つようになった。宝永・正徳期以降は一般商品の交易は城下町商業に吸収され、牛馬の取引が中心となり、一宮市町といえは牛馬市を意味するものとなった。牛馬市は四月市町（お田植祭の四月中の午の日から五月四日）、八月市（八月十九日から九月七日）、霜月市（御柱祭の十一月中の午の日から五日間）と年三回催されたが、もっとも賑わうのは春の市町であり、その間に相撲、地芝居が催されるだけでなく、何時のころか明らかでないが他所芝居の興行も認められ津山城下とその周辺の庶民に遊樂の場を提供するものであった。他所芝居の興行は内容、役者の顔ぶれの面から観客に魅力あるものではあったが、原則的には一宮市町の興行に限られている。しかしこの原則はしだいに崩れ、後述するように徳守神社をはじめ各地で許されることになった。

通常興行に際しては予め一定の手続を経て許可されることはいうまでもない。出願人が町人の場合には町年寄から町奉行、さらに大目付、大年寄へ、社寺を会場とする場合には社寺から寺社取次へも伺い出される。実際には興行の一、二か月あるいは数か月以前に内意を伺い、その上で正式に出願し興行の月日、期間が決定される。手続を経ず無断で興行した場合には相当な過料、追込みに処された例がみえる。

## 来演した他所芝居

表1に掲げた他所芝居、見世物は藩の御用日記『国元日記』と『町奉行日記』に出願が記録され、実際に興行したと考えられるものを宝暦四年から天保十二年までの間書き出したものである。今日『日記』の欠けた年次もあるのですべてではないが、大部分は書き出し得たと考える。<sup>⑨</sup>

地芝居ではなく明らかに他所芝居であるにも拘らず何処の一座であるかを記録していないものが早い年次のものが多いが、一見して来演した一座は大坂嶋之内・難波新地と播州を出身地とするものが多いことが知れる。

大坂嶋之内に役者が多く住んでいたことはよく知られているが、難波新地は明和元年（一七六四）鈴木町金田屋庄助が難波村のうち三町を請地、開発した地で、助成のため茶屋、髪結床、芝居が許されていた。当然この新開地に多くの芸人が居住し、軽業・力持をはじめとする諸芸や細工見世物がさかんに興行されて諸芸のメッカの観を呈した。このような難波新地から諸芸の一座が地方興行に出かけたのであるが、彼らの活動の知れる史料は乏しい。近世上方を中心とする都市の芸能が地方に広められる上に彼らは伝播者として重要な役割を果たしたものであり、この種の興行先の記録から一座の動きを追いつその実態と地方における諸芸の受容を考えることは必要なことであろう。

播州加西郡高室を中心とした北条万歳、北条芝居とよばれるものは、高室が文政八年（一八二五）『諸国芝居繁栄数望<sup>⑩</sup>』という見立番付に行司として載せられているほどに名の知られた芝居の地ではあるが他の地域への興行は十分知られていない。安永～寛政期龍野地方における興行について<sup>⑪</sup>、化政期津山周辺に嵐勝蔵座をはじめ多くの一座が興行していることは、高室芝居興行の地域的发展を示すものである。

来演した一座のうち話題をよんだものを一二あげて諸芸興行の一端を明らかにしたい。

文化十年（一八一三）に来演した大坂難波新地早咲京之助は安永初年から上方で二本竹軽業の名人として人気を集

[illegible]



安永 九年四月

大坂 舞子芝居一〇人連

操芝居一〇人連

天明 六年四月

人形芝居一二人連

輕業一〇人連

万才芸八人連

淡路 あみす屋門十郎座芝居

七年四月

竹田子供芝居九人連

輕業芝居一〇人連

舞子芝居八人連

寛政 三年四月

輕業七人連

曲馬五人連

鯨小見世物

唐犬小見世物

曲揚弓小見世物

四年四月

大坂上塩町八丁目 早川新藏輕業狂言一三人連

播州北条 万歳芝居九人連

大坂さか町 万歳芸一〇人連

天わう魚見世物

五年四月

人形廻し一三人連

南京操芝居三九人連

輕業九人連

さんふり小見世物

大坂高津新地六丁目 早帛梅之丞輕業九人連

操芝居

六年四月

南京操芝居一九人連

七年三月

大坂難波新地 曲馬乗七人連

大坂 万歳芝居一四人連

戸川町 嘉作

安岡町 神田屋伊兵衛

福渡町 皆木屋甚助

堺町 米屋平兵衛

戸川町 紙屋嘉助

元魚町 北原屋長七

安岡町 神田屋伊兵衛

戸川町 紙屋嘉助

上紺屋町 備前屋善次郎

野村屋和七

船頭町 高瀬屋文吉

伏見町 久世屋利兵衛

西今町 上総屋千之助

元魚町 佐伯屋宇助

中之町 松井屋和七

元魚町 北原屋長七

堺町 丸屋幸吉

元魚町 中野屋伊助

茅町 奈良屋七郎右衛門

二階町 品屋恵十郎

東新町 倉敷屋惣兵衛

林田町 久五郎

東新町 倉敷屋宇助

戸川町 岩見屋孫兵衛

福渡町 名古屋清七

吹屋町 甚吉

福渡町 名古屋清七

一 宮

〃

〃

〃

一 惣 社

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

高野神社

河原町

一 宮

〃

〃

〃

德守神社

一 宮

〃



八年三月	南京操芝居二八人連	船頭町	中村屋庄助	德守神社
四月	大坂難波新地 曲馬乗七人連	吹屋町	甚吉	一宮
	大坂 万歳芝居一三人連	堺町	山手屋利七	〃
	女力持輕業芝居九人連	下紺屋町	鳥屋利兵衛	〃
	大坂難波新地 曲馬乗七人連	船頭町	瓜生原屋伝吉	〃
	大坂 こま廻し芝居五人連	新魚屋町	さつま屋大助	〃
九年三月	南京操芝居三二人連	二階町	嶋本屋音治	河原社・
	大坂嶋之内 輕業芝居一人連	京町	古金屋伊之吉	德守神社
	大坂嶋之内 万歳芸一人連	元魚町	北原屋治助	〃
	大坂 手鞠取三人連	上紺屋町	左太郎	〃
十年二月	芝居	宮脇町	富沢屋又兵衛	小性町
四月	播州北条 万歳芝居一三人連	船頭町	山手屋理七	一宮
	大坂 八人芸四人連	東新町	美濃屋利兵衛	〃
十一年三月	南京操芝居三二人連	宮脇町	富沢屋又兵衛	聖徳寺抱地
四月	大坂 輕業一〇人連	河原町	福美屋久蔵	一宮
	播州北条 万歳芝居九人連	福渡町	福渡屋儀助	〃
	大坂嶋之内 輕業芝居九人連	中之町	森岡屋太吉	〃
	大坂嶋之内 万歳芝居一三人連	小性町	倉吉屋茂七	〃
十二年三月	大坂安堂寺町筋玉造 鳥屋次兵衛孔雀見世物	船頭町	中村屋庄助	一宮・庚申堂
四月	南京操芝居三〇人連	二階町	立花屋伝吾	河原
	大坂 万歳芝居七人連	伏見町	筑後屋亀次郎	一宮
	播州三木 操芝居六人連	船頭町	山手屋利七	〃
享和	大坂 芝居三三人連	中之町	倉敷屋惣兵衛	八出天神社
元年三月	大坂 万才芝居一人連	京町	山崎屋佐七	一宮
四月	大坂 輕業九人連	戸川町	福見屋久蔵	〃
	淡路島 操芝居八人連	船頭町	塩屋音松	〃
	狼小見世物	京町	ぬめ屋藤助	〃



六月	大坂難波新地 桂文三郎嘶物真似・噺方
十四年四月	大坂嶋之内 玉本小免座輕業芝居一三人連
	播州高崎 嵐福藏座芝居六人連
	播州高崎 伝之進座操芝居一一人連
文政 元年四月	江戸 玉本巴座輕業一三人連
	播州高崎 筒井勘七座芝居一三人連
二年四月	大坂 浅尾国五郎座子供芝居一三人連
四年六月	大坂 竹田細工人形見世物細工人・噺方三人
六年六月	大坂 竹田細工人形細工人・噺方三人
	籠細工見世物
七年六月	竹田細工人形数五ツ、細工人 口上言 噺子方兼
八年四月	播州赤穂 花岳寺宝物
	大坂 沢村岩五郎座芝居一三人連
六月	糸からくり人形見世物
	水細工・糸からくり躍人形見世物
九年六月	播州中嶋村 海右衛門基盤人形見世物噺子方・手伝四人
十年四月	大坂天満天神町 作太夫嘶人・嘶物真似・噺子方四人
十一年四月	人形芝居
六月	江戸本石町三丁目 美濃屋甚蔵貝細工見世物
	大坂難波新地 玉川安次郎・鶴谷菊丸・難波一蝶
	嘶物真似・噺子方
十月	大坂嶋之内 津国屋武兵衛
	駱駝二足飼育・唐人噺子方兼四・五人
十二年五月	京都 野村柳吉曲馬見世物一九人連
六月	大坂難波新地 嘶物真似師・噺子方七人連
十三年四月	播州高崎 筒井勘七座芝居一三人連
六月	播州中嶋村 基盤人形遣浅右衛門・噺子方六人連

戸川町	茶屋忠兵衛	一
安岡町	福島屋忠兵衛	宮
船頭町	倉敷屋平蔵	〃
鍛冶町	鍛冶屋宇兵衛	〃
二階町	櫻村屋藤七郎	〃
船頭町	中村屋政兵衛	〃
船頭町	中村政兵衛	〃
宮脇町	倉敷屋利八	〃
下紺屋町	出口屋岩吉	〃
上紺屋町	米屋政右衛門	〃
福渡町	倉敷屋林太	〃
船頭町	俵屋伊兵衛	〃
上紺屋町	米屋政右衛門	〃
福渡町	弓削屋清治	〃
福渡町	増見屋善兵衛	〃
福渡町	倉敷屋林太	〃
京町	弓削屋清治	〃
福渡町	備中屋小八	〃
宮脇町	倉敷屋林太	〃
福渡町	福山屋富蔵	〃
福渡町	倉敷屋林太	〃
京町	備中屋小八	〃
上紺屋町	倉敷屋林太	〃
新職人町	東屋与助	〃
上紺屋町	倉敷屋林太	〃
一	德守神社	德守神社
一	琳寺	琳寺
一	德守神社	德守神社
一	宮	宮

天保 二年四月 六月 三年四月 四年四月 六月 七年五月 六月 九年六月 十年三月 四月 六月 十一月五月 六月 十二年三月 六月	大坂 三宅笛次郎座一五人連芝居 嘶物真似・噺子八人連 大坂難波新地 若林力松力持九人連 大坂嶋之内 満佐越万歳芝居八人連 大坂道頓堀 早雲岩吉輕業師八人連 大坂難波新地 鶴藏嘶物真似・噺子四人連 播州山崎村 浅七基盤人形見世物・噺子・手伝一〇人連 江戸疊町一丁目 市川梅枝嘶物真似・噺子二人連 大坂難波新地 嵐亀藏座二六人連 播州荒井村 藤川五郎兵衛基盤人形遣・噺子一〇人連 江戸 龍蝶・市染・遠風嘶物真似・噺子三人 基盤人形・噺子方一〇人連 大坂難波新地 播磨屋亀藏座一八人連 大坂難波新地 嵐亀藏座一八人連 大坂難波新地 瀬川如柳嘶物真似四人連 大坂嶋之内 多のぐ屋理兵衛・好太夫ら浄瑠璃二人 大坂難波新地 富松ら嘶物真似三人 播州高室 勝藏座芝居二〇人連 大坂 浄瑠璃竹本越太夫組太夫五人・三味線三人	材木町 米子屋庄吉 二階町 竹屋佐助 上紺屋町 米屋六兵衛 不詳 河原町 高屋治助 上紺屋町 米屋六兵衛 福渡町 藤屋平八 二階町 松嶋屋清太郎 新魚町 鳥屋与惣兵衛 鍛冶町 鍛冶屋伊右衛門 福渡町 播磨屋伊右衛門 鍛冶町 鍛冶屋藤四郎 新魚町 山手屋治兵衛 船頭町 倉敷屋長五郎 上紺屋町 倉敷屋林太 京町 秋田屋久藏 小性町 赤穂屋岩吉 伏見町 備前屋彦助 美濃職人町 伊賀屋熊治郎	一石松宮 一宮 " " " 不動堂 追廻し河原 宗道宮 徳守神社 宗道宮 界町 一宮 徳守神社 不詳 徳守神社 界町 徳守神社
--	---	---	---

めたが、さらに芸に工夫を加え、一本竹の曲という両端を吊した竹の上でいろいろの芸を演じ江戸でも話題をよんだ役者である。女太夫玉本小免は紙渡り、元結渡りの名人として知られていた小金と関わりがあるのであろうか。

文政十二年（一八二九）五月来演した野村柳吉は大坂生まれの女曲馬の弟子幾世（二代目柳吉）であろうと考えられる。初代柳吉は初めて芝居の所作事を馬上で演じ、早替りなどを創案して当時女曲馬の中興と称された人である。二代目柳吉が文政三年二月大坂で一世一代を興行した際、女太夫五人、男騎方八人、噺子方十二人、口上二人、世話

人一人、それに太夫元と頭取を加へて実に三十人の大一座であつたが、演じた曲が能の鉢木、熊坂長範でやや高尚であつたことと、木戸銭が高かつたため意外に入入りであつた。津山の興行は引退後の公演ということになるが、このとき曲馬四疋、騎方、囃子方、口上言、其他馬飼人等都合一九人の一座で五日間の興行出願であつたが雨天などにより加日三日を許されようやく難渋を免れる状況であつた。

文政期は細工類見世物の全盛期といわれている。文政二年二月聖徳太子千二百年忌開帳の際天王寺西門の北に大坂道頓堀上大和橋詰の籠職一田正七郎が籠細工に新機軸を出し、「天竺僧仮寝姿」と称する釈迦涅槃の様子を大規模な籠細工の組み合せて演出し、空前の大当りをした。直後これは江戸に搬送され大きな評判をよんだ。これを摸して撰津有馬の籠細工人吉田利三郎が京都、名古屋で興行した。文政四年津山で興行したのはいずれの流れを吸むものであつたか明らかでない。

孔雀の見世物は太坂道頓堀でしばしば登場しているが、その美しさから禽獣見世物界の寵児となっている。寛政十一年（一七九九）一宮市町の興行後さらに五月七日から三日間二階町庚申堂で興行したが、家中へ見せることを出願理由とし、例外的に家中の見物が許されているのは孔雀のもつ格別の魅力によるものであろうか。

文政十一年十月「駱駝と申獸二疋并飼方之者四、五人共引受、唐人囃子方兼」一行が興行している。駱駝は文政四年六月オランダ商人によつて長崎に輸入され、大坂の香具師仲間がこれを買とり九州、四国を巡業し、和歌山を経て文政六年四月大坂に到着した。大坂の駱駝見世物は意外に入入りで、その後京都、江戸へと興行を続けた。江戸では両国広小路で三二文という高い札銭にも拘らず文政七年閏八月九日から翌年春まで長期興行を続け、さらに東国、越前を経て九年十一月名古屋大須門外で興行した。その後三河、遠江を巡り文政十年正月再び名古屋入りしたが不入りでさらに伊勢、大和を経て五月大坂難波新地で興行した。しかしこれも見古されたためか不入りで北国へと出立した。津山への立寄りが山陰からのルートであつたかと考えられるが五日間の珍獣の見世物に徳守神社の内外は大いに

沸いたことであらう。

## 興行の状況

表1にみるように可成りの頻度で他所芝居が興行されているが、これには出願人||興行主側に興行を成り立たせるに足る観客確保の見通しがあったことがその背景にある。

興行成績を観客数ないし木戸銭収入の面から窺うために『国元日記』『町奉行日記』の記録により作成したのが表2である。地芝居・他所芝居を問わず興行期間中は町奉行所から同心組を下締りのために興行場に派遣した。その際興行主が当日の観客数を大人、小人別に、あるいは木戸、中座の別に人数、売上高を下締りの役人に報告している。その報告を日記に記録している場合があり、知りうるものを煩をいとわず統計として示したものである。

観客数をみると宝暦十二年(一七六二)西新座の芝居のように一日平均八五人という不入りの場合もあるが、概して二〇〇人を越えるものが多い。寛政九年(一七九七)三月から四月にかけて二場所合せて三〇日間の長期興行した南京操芝居には九千四十七人の観客を集め、大札銀六分、小札銀三分とすると銀五貫一九七匁八分の興行収入を上げたことになる。寛政九年の宗門改による津山の町人口が七千二百五人であるから、この興行に町人口の一・三倍を動員したことになる。寛政七、八、九年と連年一宮市町は他所芝居で賑わったが、その他に連年徳守神社で南京操芝居が興行され五千人余を観客として動員している上にさらに右の九千人余の観客数は何を物語るものであろうか。一宮市町以外に他所芝居を興行しても、少なくとも城下町人口の半数以上に相当する観客をよび込み得るが、役者と興行日数に恵まれればさらに多くの観客が期待できることを示している。すなわち一宮市町における例年の他所芝居の興行は城下町周辺の人びとの芸能に対する関心を培い、相当数の固定的観劇人口を擁するにいたったといえよう。

興行の出願人は興行期間中の一座について一切を引き受ける保証人でもあるが、通常日記の記録には一人が記さ

表2 主な他所芝居・見世物の興行月日と観客数・木戸銭収入

1) 享保8年	見世物															於 総社				
4/22	25	26	27	28	29	5/1	2	3	5	8	9	10	12	13	計					
113人	445	478	387	500	422	419	228	159	570	50	166	94	125	80	4,236					
2) 宝暦12年	芝居					於 西新座														
4/ 9	10	11	15	16	17	18	19	20	21	22	23	25	26	計						
80人	120	130	185	155	135	115	76	81	46	45	30	20	55	1,273						
3) 寛政5年	人形万歳					於 総社市町														
3/19	20	22	23	24	計															
6分札	143人	135	123	84	24	509														
3分札	183人	96	85	28	11	403														
4) 寛政5年	人形廻し					於 高野神社														
4/ 5	6	7	8	9	10	計														
6分札	68人	195	223	246	208	100	1,040													
3分札	37人	53	45	53	63	53	304													
5) 寛政5年	南京操芝居					於 河原町明地														
4/ 6	7	8	9	10	11	14	15	16	18	19	20	25	26	27	28	5/2	5	6	7	計
222人	327	383	388	481	523	486	382	202	198	276	113	117	356	111	68	82	352	428	403	5,898
6) 寛政7年	南京操芝居					於 徳守神社														
3/25	26	27	28	29	30	4/3	4	5	6	7	9	10	14	15	16	19	20	計		
125人	203	280	278	230	164	472	435	320	268	176	203	535	243	122	238	321	103	4,716		
7) 寛政8年	南京操芝居					於 徳守神社														
3/ 8	9	10	13	14	16	17	18	20	21	22	23	24	25	26	計					
112人	234	250	314	362	418	358	253	412	270	366	342	583	675	412	5,361					

8) 寛政9年	南京操芝居	於 河原町明地・徳守神社																				
河原町明地		3/20	21	22	23	24	25	26	29	30	4/1	2	3	4	5	6	計					
大札	92枚	208	210	223	248	135	185	195	187	396	353	370	310	153	192	3,457						
小札	19枚	30	31	18	23	21	24	28	17	32	19	21	25	18	17	343						
徳守神社		4/ 7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	計					
大札	327枚	510	305	320	230	260	350	248	230	363	452	425	312	260	230	4,822						
小札	37枚	53	26	18	23	21	28	26	32	29	38	31	24	18	21	425						
9) 寛政10年	芝 居	於 小性町林屋新吉・石砂屋忠助所持之明地																				
		2/12	13	14	15	17	18	19	20	21	23	24	25	26	27	28	29	30	3/1	7	8	計
大札	50枚	75	118	160	132	190	320	350	150	120	220	230	52	280	430	310	170	103	230	260	3,950	
小札	35枚	38	43	45	38	55	100	115	48	28	40	50	48	72	208	170	130	90	155	192	1,700	
10) 寛政11年	南京操芝居	於 聖徳寺抱地新田村広原分																				
		3/12	13	14	15	16	17	18	19	21	24	25	27	29	4/2	5	7	8	9	10	11	計
大札	120枚	152	145	121	138	175	225	205	18	295	382	232	503	415	162	125	257	173	203	123	4,169	
小札	43枚	53	58	42	41	53	66	51	6	125	75	37	102	152	51	80	31	42	67	57	1,232	
11) 寛政12年	南京操芝居	於 河原																				
		3/ 9	10	11	12	15	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	計	
大札	51枚	103	118	200	215	275	250	305	320	380	250	125	370	376	290	215	285	460	332	4,920		
小札	19枚	26	29	32	28	32	32	45	45	48	35	27	46	52	35	28	38	58	37	692		
12) 芝 居		於 高野神社																				
		3/9	10	11	14	15	18	19	23	24	27	29	計									
大札	16枚	59	50	53	70	98	103	55	95	250	450	1,299										
小札	14枚	37	30	45	35	45	40	40	50	50	50	436										



13) 天保7年 大坂難波新地・嵐亀藏座芝居 於 追廻し河原

6/25	26	27	28	7/1	2	5	6	7	8	16	17	18	19	20	計
木戸銀 350匁	220	510	426.5	507	580	620	236	703	250	380	216	280	758	643	6,679.5
中座銀 200匁	525	1,100	869	897	1,500	1,030	457	847.5	268	320	215	330	882	615	10,055.5

14) 天保10年 大坂難波新地播磨屋亀藏座芝居 於 堺町佐伯屋恒太郎所持之明地

3/23	24	26	27	28	29	4/1	計
大人 木戸札 325枚	381	491	488	305	425	438	2,853
銀 487.5匁	574.5	736.5	732	907.5	637.5	657	4,732.5
小人 木戸札 115枚	129	156	186	385	156	173	1,300
銀 115匁	129	156	186	385	156	173	1,300

15) 天保12年 播州高室・勝藏座芝居 於 堺町佐伯屋恒太郎所持之明地

3/23	24	25	26	27	28	30	4/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	計
木戸銀 220匁	415	420	350	380	503	331	331	532.5	570	501.5	345	429	431.5	381.5	319	650	515	7,625
中座銀 116匁	256	247	223	261.6	317	436	204.6	336.3	311.4	341.3	275.3	332	311	298	206.3	413	241	5,126.8

れているにすぎない。しかし引請人と請人が記されている場合もみられ、請人として連帯保証する場合もあったと考えられる。出願人は家持町人に限られたわけではなく、倉敷屋林太の例にみるように借屋人の場合も少なくない。寛政七年の名古屋清七、文政十一年の倉敷屋林太のように一年に二度異なる興行を出願することも許されていた。二年以上にわたり出願人となった例として米屋十左衛門、山手屋利七、倉敷屋音吉各三件、矢野原屋七兵衛五件、池淵屋民藏六件、倉敷屋林太七件がある。彼らの出願理由にはほとんど「兼而心願ニ付為願開」という極めて抽象的なもので困窮のため生計費の補填をはかるという如き具体的理由をあげていない。従って興行出願は本人の経済状況とは関係なくおこなわれていたとみてよからう。しかし池淵屋民藏が一時期は毎年出願し、引き受ける一座は一件を除けば播州北条芝居に限られている点から、一座と引請人との特定の関係が生まれていることが窺える。さらにすすんで倉敷屋林太

のように江戸、大坂、播磨など各地の一座を頻繁に引き受ける半ば專業的興行引請人の存在も考えられるにいたった。

興行期間として許されるのは晴天三日、五日、七日、十日、十五日のいずれかが普通である。限られた期間で如何に観客を動員できるかは期間中の天氣に恵まれるか否かの問題と、興行できなかった日数や不入りを加日を追願することによってどれほど観客数を回復できるかの問題にかかっている。

寛政九年の南京操芝居は河原町明地で晴天十五日で出願され、二日間の雨天で休演し、二日の追願も認められただけでなく、場所を徳守神社に替えて改めて晴天十五日の興行が許され、この期間は好天に恵まれて好条件の興行であった。これと反対に寛政五年河原町明地における南京操芝居の興行は晴天十五日を条件に許されたが、雨天三日と大納言一橋治済の第二子刑部卿治国の死去により鳴物停止四日間の命をうけ、合計七日間の休演を余儀なくされた。このため加日五日を追願し認められたが、さらに四日間雨天にあり、三九人の役者を三日間抱えながら興行は二〇日間に止まり引請人の大きな損失を招いた例がある。加日追願に際しては出願人と町奉行を通した御用番との間に深刻な応酬がみられることもある。寛政十二年三月河原における南京操芝居興行については特に二〇日間認められていた。期間中の雨天二日分については加日は容易に認められたが、松平出羽守一行が津山城下を通行するため一日差留めを命じられた分を加日することについて御用番中は「上御故障ニ而数日指留下方難渋ニも相成候節ハ御評義之上日延可被仰付候得共、唯一日之不足位之義ハ下方ニ而も相休候義も有之候得ハ不被仰付」と町奉行は不足一日が四月に懸っても問題はないと上申したにも拘らずこれを許可しなかった。

観客の不入りを理由に加日追願をはかろうとする場合もあった。寛政十年小性町明地における芝居興行に際して、初日の観客数を大札五〇枚、小札三五枚と報告したが、札数が少な過ぎることに疑いをもたれ「芝居木戸札員数以前より正敷にて不書出、余程員数を減し書出候事之由、定而追願等可致心得にて左様ニも書出し候事ニ而も可有之候得共、其段ハ上ニ御食着無之」と木戸札の数を過少報告して不入りを口実に加日追願しようとする企てを見破られ、大

目付から加日と不入りは無関係であると注意をうけている。この興行は雨天による五日の加日を認められたが、さらに「甚大損有之難渋仕候付、今五日再加日」を追願したが許されず終った。

期間を確保することと並んで、引請人の裁量で表向き地芝居としながら他所芝居のものを取り交えるとか噺物真似などについては許される範囲ぎりぎりの趣向を凝らすこともみられる。

前者については地芝居とは称しながら他所の役者を買入れあるいは全く他所芝居に替えるなど種々名目を替えて興行する例である。これは「市郷之もの共中以上ハ見物ニも不罷越よし」とあるように地元芝居に見飽きた層を呼び寄せるためにも必要であり、その事情は町奉行の立場からも理解される面があった。

当地ニ而他所芝居強而制候へハ、近辺他領江罷越候様相成事故、同じくは折々ハ他所芝居御免と可被成候得ハ、

他領江参候ものを制し、且他領江蒔候金銀却而当地江落候様可相成、他所もの買入候得ハ金銀多分他江出候道理ニ候へ共、実意多分他へ出候ものニも無之、過半ハ当地ニ相残り候ものニ而御城下融通ニも相成候もの之由、芝居等を相好候事ニも無之候得共、市郷共年中家業のミニ而何所相慰ミ事も無之ニ付、折々ハ芝居等為見候共家業之妨と申程之事も有之間敷、旁他所御免ニ相成候得ハ種々取巧も相止、名実齟齬不致候而宜哉ニ差考候<sup>④</sup>

町奉行は他所芝居の興行をむしろ城下の融通のためあるいは町人慰安のために積極的にすすめるべきとの立場とり、他所芝居抑制策が出願人に種々の名実と齟齬した企みを思い付かせることになると指摘する。

後者については天保十年六月徳守神社において興行した噺物真似に予て禁じている噺子方を入れ観客の喝采を得たが、大目付が噺子を加えることを咎め町奉行を通じて禁止させた。その際町奉行は夜廻り組のものに対して「尤物真似と申候得ハ如何様之真似を致候ても物真似ニ有之、若三味線引又ハ鞍打等之真似を致候節、当人少々之鳴物ハ見免し、外々鳴物を以噺候義ハ決而不相成と申心得<sup>⑤</sup>」を伝えている。藩側は物真似の拡大解釈について観客に受けようとする引請人側に実際には譲歩せざるを得ない状況を窺うことができる。

右にみた城下町津山とその周辺の興行に関する一般的状況を踏まへて、天保期町在の景況が深刻な時期に他所芝居の興行がどのように理解されていたか、天保七年六月大坂難波新地嵐亀蔵一座の興行を中心に考えてみたい。

### 天保七年の興行

新魚町人馬問屋鳥屋与惣兵衛が天保七年一月、前年十二月藩主斉民が正四位下左近衛権中將に昇進した祝いとして当年に限り他所芝居御免を町奉行に願ひ出た。前藩主斉孝が昇進した際には城下の各町から野台芸を披露した前例があるが、町方の現今の状態からすれば一台銀六、七百匁を要する野台芸は町方難渋を増すものであり、この際「他邦之もの共見物ニ入込、市中一統之賑わい」のためにも他所芝居の興行を願ひ出たのであった。町奉行は他所芝居が町方賑わいをもたらすものであることは認めながら「御祝と号、町々ねり物等差出候方、出費多候共制度之緩ハ為指義も有之間敷」と省略年限中のことでもあり、奢りを助長しないためにも練物に止ることが得策であるとの存寄を付し御用番に伺ひ出たが、結局このときには他所芝居の願ひは却下された。

寛政期に人馬問屋富沢屋又兵衛が芝居興行を引請けた例はあるが、此たびの鳥屋与惣兵衛が興行を出願するにいたった事情として考えられることは人馬繼立収入の減少による困窮であろう。前述したように津山が陰陽交通の要衝であり、ことに出雲街道は官道として公用人馬の徴発も多く、例えば天保七年三月松江藩主通行に際して人足二八五人、本馬四二疋を繼立るなどがみられる。その負担が如何なるものであったか、人馬問屋の云い分は次のようなものであった。

人馬問屋助精銀一ヶ年四貫五百目之内二百目臨時手当ニ残置、残四貫三百目月々割渡来候処、出羽守通行ニ付てハ多分足銀ニ相成甚難渋ニ付、月々ニ割相渡候分御通行之砌、御参勤之節八百目、御帰国之節一貫目相渡異度、大年寄孫右衛門申出ニ付同役申談候処、六百目、八百目と相極渡遣、月々右引残り割渡候而可相済旨如何取斗可

申哉伺出ニ付、月々之分相減候而も差支も無之候へ、不苦候旨相渡可申旨、尤以後又候月割之増願出候而も不取  
用旨急度申達置。

一か年の助精銀の月割分の五か月分に相当する額を松平出羽守の往来費用として支出して欲しいとの願いである。  
人馬問屋は民間の人馬繼立をおこなつてはいるが、諸色高騰で繼立賃金は相対的に低下し、割増しの願いは嘉永元年  
に到つてようやく五か年間を限り三割増を認められる状態であつた。人馬繼立の値上げが町在の物価騰貴を直接に誘  
発するだけに容易に許されなかつた事情がある。

周辺諸国の動向と人の往来に比較的通じている人馬問屋が他所芝居の興行を企て、一時的にせよ困窮の立直りをは  
かろうとするのは周辺諸国の興行と採算についての事情を十分踏まえての判断であつたと考えられる。

願書を提出して四か月間人馬問屋の再願の動きはみられない。その間例年通り一宮市町の見世物、河原町において  
五日間地元万歳芸が興行された。

五月十七日鳥屋与惣兵衛は再び願書を町奉行に提出した。そこにおいては、近ごろ上方役者が伯耆興行の帰途津山  
城下を通行することであるが、ついては「近來他国ニ而も為繁榮芝居狂言被免候趣承候付、下方賑ひ之ため於市  
中晴天十日芝居御免被成下度」とするものであつた。初めの願書に比べると具体的であり、他国にも見られるように  
繁榮のため、すなわち町方の景氣振興という意図がはっきりと前面に出ている点が注目される。さらに一宮市町以後  
は秋まで他所芝居は避けるという原則が納涼芝居が興行されはじめてしだいに崩れていること、市中における他所芝  
居興行は人寄せの点で有利であり、過去の例の多くが興行に成功していることなど諸般の情勢を十分考慮しての再願  
であつたことが窺える。

この再願に町奉行は翌十八日存寄を付して御用番へ伺い出している。

昨日差出候他所芝居願、近辺落合并倉敷辺ニ而も致興行候趣も有之、右等之場所江当所を罷越候へ、当所江引

付候方少しハ為融通ニも相成可申、又ハ御札場兩替之一条ニ付而も銀札場奉行考も有之趣ニ付、旁已来之例に不相成、今般限御聞届相成候而可然旨存意申上

市中芝居を認めることにより周辺農村から城下に金融の流れをよび、銀札場兩替にも益するところがあるとする町奉行の意見である。市中については御用番から難しいとの判断が示され結局城下をはずれた横山村追廻し河原とされて興行が許可された。その際町方に対して「銘々家業之暇繰合、見物ニ参候義勝手次第第二候得共、時節柄を省ミ、万端質素ニいたし、飲食・衣服等ニ至迄、兼而申達候通堅相守奢ケ間敷義致間敷」と触れた。

再願に際して興行の木戸銭をはじめ仕出し類の値段付が提出されているのは興味あることである。

割子弁当 沓人前 代六分

菓子 沓折 六分

煎茶 沓土瓶 二分

多葉粉盆 二分

酒三合入 沓徳利 六分

肴 沓鉢 沓匁

中座仕切 上場 式匁五分

次場 式匁

並場 沓匁五分

平場 五分

木戸札 沓人前 沓匁

同子供 五分

右之通ニ而折屋と唱候而元方江仕出方之ものゝ巻錢も不差出、嚴重ニ締方申付、押売等為致不申、応好為差出可申、尤直段付張出置候。

観客に対する仕出し類の一品毎の直段を張り出し、押し売などをしないなどを約束している。天保七年八月龍野城下においても津山とほぼ同じ趣旨で網干屋儀助らが躍狂言を願ひ出たが、その折差出した仕法書中の仕出しの内容と比較してみると、同じ品物でランク付けされて龍野の場合が種類は多いが、値段の点では津山の場合かなり抑えられていることに気付く。また中座仕切がみられ四段階に席料が区分されていることは従来に興行にはみられないことで、後に「先年追廻ニ而大芝居興行之砌々三都も同様中座取捨、大造之座料取之候」と三都の芝居小屋と同様の中座と見做される程の可成り整えられた中座が設けられたことを想像させる。

不動堂地内で興行されていた噺物真似は六月十日で終わり、鍛冶町宗道宮地内の碁盤人形見世物も二十三日夜で終わり、翌二十四日一座の顔見世と大入りとして三番叟を踏み「殊之外多人数群集」し、この興行への人びとの期待を思わせた。

このときの芝居の外題は明らかでないが、一座の役者名は鳥屋与惣兵衛が町年寄に提出したものの控えが「月番構御用日記」に記されている。

立役 嵐三津之助 市川勝治郎 坂東寿蔵 浅尾竹六 嵐三津蔵 嵐三津太郎 市川滝五郎

敵役 嵐来助

実悪 市川櫛右衛門

立役 嵐三津五郎 嵐七蔵

若女形 沢村共若

女形 山下万菊 市川亀三郎 市川櫛三郎 嵐若松

子役 浅尾専十郎 山下大吉 中村多蔵 市川福松 嵐大吉

浄瑠璃 竹本登志太夫 豊竹菊太夫

三味線 靄沢登茂吉

座本 嵐亀蔵

頭取 藤川伊勢松

二十六人の一座である。座本の嵐亀蔵は文政十一年戊子十二月吉日播州東高室大蔵神社の狗犬奉獻者十七名中に「大坂 嵐亀蔵」とあるのと同じ人物と考えられ、高室とも関係の深い人であったことが窺える。一座のうち他に活躍していることの知れる役者は少ない。嵐三津五郎・三津之助親子は天保三、九兩年の安芸宮嶋の大芝居や嘉永四年正月大坂道頓堀大西芝居、三津之助は天保六年三月の讃岐金毘羅会式芝居、天保十二年九月、嘉永四年正月の道頓堀大西芝居にみえ、浄瑠璃の竹本登志太夫は文政五年五月大坂御霊社奉納寄進芝居に竹本式太夫とともにつとめていることが知れるほかは大半が無名の役者である。

寛延初年に発刊され化政期にいたるまで広く読まれた「新撰古今役者大全」に田舎芝居の第一は伊勢の古市、ついで安芸の宮嶋であり、これら芝居には京・大坂の大立もの一人か二人、女形も人に知られたものが入り交っているが「外はつるに聞も及ぬ名ばかり、たとへばりっぱな菓子箱にあられをつめて、その中にたつたひとつあるへいたうに松風が一枚、きくりん糖が二つ程ある様にて、似つかぬ物なるべし、大津、伏見、西国、北国所々へ仕出す勸進元、京、大坂にありて長崎までも仕組てゆく也」と地方興行一座の役者の仕組の内実を伝えているが、嵐亀蔵一座はこれをさらに小粒化した一座と考えられるが、地方の観客からすれば、上方で活躍した役者が加わっていることで十分魅力を感じたとも考えられる。

六月二十五日から七月八日までの雨天を除いた十日間の興行については「芝居兎角雨天勝、評判ハ宜候得共入無數



ニ而、当分損毛ニ相成難渋<sup>⑤</sup>」と引請人は嘆き、加日五日を再願している。加日五日については横山村、大庄屋ともに差支えなしとしているが、中庄屋から申し出の簡条があった。その内容は明らかでないが、地方支配の任にあるものとして長期興行を好ましくするものであったであらうことは容易に推察できる。結局加日五日分は益明けの七月十六日からとされた。引請人として加日は認められたけれども、盆休み七日間の空白は痛手であった。

ともあれ十五日間の興行収入は木戸銭銀六貫六七九匁五分、中座一〇貫五五匁五分、計一六貫七三五匁に上った。中座の収入が全体の六〇%を占める点からも窺えるように、従来の芝居小屋とは異るかなり整った小屋造りが全体として記録的收入に繋がったといえよう。しかし引請人側は、此たびの興行は「雑費多分有之、損毛不少難渋<sup>⑥</sup>」として二年後の天保九年に再度の興行を願ひ出ることになるが、実際には所要経費をどの程度要したのであろうか。龍野の仕法を参考として試算すれば、興行経費は銀九貫余となる。役者給銀、中座などを含む小屋の建設費用などを龍野の仕法と同一にはできないことを考慮に入れても「損毛不少」という云い分は理解し難い。また仕出しの売上げ高も興行収入に相応してかなりの額に上ったと考えられる。

此たびの十五日間にわたる芝居興行に対して町奉行は、どのような評価を与えたであらうか。

大目付から規制を弛めることについて存寄を求められた町奉行は、表向き制度を弛めることは賢明な策とはいえない。是非弛めたいとするならば各々の役場の心得として承知置き、一般庶民にそれを知らしめる必要はないと述べた後、当時の町方の様子について次のように述べている。

盆前之処如何可有御座哉と心配仕罷在候処、当年珍敷他所芝居御免ニ相成、六月下旬ハ相始、七月廿一日迄ニ十五日興行仕、右芝居ニ人氣移リ、且ハ相応商内御座候処ハ盆前も存外ニ穩ニ而相済申候、右芝居も時節柄初発ハ郷中ニ而も彼は申立候趣、其外悪評も相聞、如何敷奉存罷在候処、相始候而ハ急度評判も宜敷、相応見物人も有之、元方仕候もの共も差而損毛相立候程之義も無御座、右ニ付而も市中之融通ハ不少様子ニ相聞、重疊之義ニ

御座候、尤右芝居御免ニ相成候砌ハ彼是気分も相緩、御制度筋も相緩候様申触候義も有之、触達も取斗義ニハ御座候得共、格別ニ相緩不申候得ハ宜と奉存罷在候処、存外興行中も穩ニ而、御制度筋相緩候趣ニも無御座候。

米価は津山町米仲買相場で六月十一日一石銀九四匁であつたものが同十五日九九匁、二十八日一〇三匁、七月二十日一〇九匁、七月二十七日一一三匁、八月二十一日一二五匁と二か月余の間に二六匁も急騰する状況<sup>⑤</sup>下で二宮村周辺では打こわしの噂もあるなど不穩な空気もあり「中々扶持米等十分ニ貯候ものハ無御座候」というのが町方の実状であつた。このような先行き不安な雰囲気<sup>⑥</sup>の漂うなかで芝居が派手に興行されるについては許可した町奉行の側に不安もあつたが、始まつてみると評判も次第に高まり、人心の沈静化に資するところがあつたと評価している。しかし予想通りの観客も集まり、引請人に損銀が出るほどではなく、観客が芝居周辺にもたらす二次的経済効果は市中の融通をはかるに多いに役立ち、またそれにより格別奢侈の風を助長することもない。このように町奉行の興行に対する評価は極めて樂觀的なものであつた。このような評価を生んだのも「先ツ当年ハ最早間もなく新穀ニ移候得ハ可也ニ取続可申<sup>⑦</sup>」という見通しがあつたからであらう。

現実には秋の不熟、米価の急騰の事態を迎え極難渋の町人に対し粥の施行がなされたが翌八年には疫病の流行もあつて町人口の一〇%強に相当する七八七人の死失者を出す最悪の状況で、藩はこれに対し有効な手を打つこともなかつた。ただこの間に例年になく心学講釈の催しに力を入れ人心の鎮静化に懸命であつたことが注目される<sup>⑧</sup>。他方このような深刻な状況下で「年柄之咄等相止、芝居等遊事ニ心寄候様之人氣ニも有之哉<sup>⑨</sup>」の風聞が立ち、町奉行が調査にのり出している。結局「芝居等之取沙汰ハ一宮市町ニ付而之義」の噂さで、別に芝居興行の試みがあるわけではなかつたとし、むしろ一宮市町についても「当年之處ハ年柄ニ付、為見物様之義も都而相止」めるべきだと主張している。

## おわりに

以上近世後期における津山とその周辺に展開された芸能について『町奉行日記』の記録を通してみてきた。交通の要衝であり、一宮市町が例年の興行の場として確保されていたこともあって、この地での他所芝居の興行は比較的多く、観客も知りうる限られた範囲ではあるが相当あり、引請人が著しい損金を蒙ることもない状況であった。

興行に関わるこのような実績を背景として出願人の生計費補填や仲間の救済という個人的な意図を越えて、他所芝居を町方融通をはかる手段として積極的に利用しようとする企てが生まれる。さらに藩側は他所芝居が町在の人びとの生活と密着しているだけに経済的融通だけでなく人心の沈静化にも期待する側面が意識されてきた。天保七年追廻し河原における嵐亀蔵一座の興行は、町在と藩双方の期待を担ったものであり、その後の興行は右の延長上に設定されたものであると考える。

天保十三年七月三都から旅稼ぎに出る歌舞伎役者を抱えおき、諸国の城下社地で芝居興行をすることは、その地の風俗を乱すものであるとの理由で幕府がこれを禁止した。この禁令は他所芝居が各地にさかんとなり、新しい社会的機能を果そうとする部分を全面的に失わせるものであったといえよう。

### 註

- ① 『津山市史』第三卷近世Ⅰ（昭和四十八年）一七五頁。
- ② 『津山松平領の人口』（『津山郷土館報』第一五号、昭和五十七年）所収の「町方宗門改」によれば、町方の人口は文化十一年六、九六五人、天保元年六、八二五人である。
- ③ 『町奉行日記』（津山郷土館所蔵 以下『日記』と略す）には城下に数か月滞在して商いをする他所商人について出身地、扱い商品および宿泊開始、出発の月日を宿元が届出したものを記録している。
- ④ 藤巻正之編『美作国神社史料』（大正九年）三頁。
- ⑤ 三浦秀有「民間信仰の一視点―岡山県の使令信仰について―」（『岡山県史研究』第三号、九二頁）。
- ⑥ 『津山市史』第三卷 二五一頁。
- ⑦ 家中に対しては妻子にいたるまで市町への立寄りを厳禁す

る旨の触がその都度出されている。

例年之通一宮市町彼地立參候義可爲無用候、馬相調候へ、其段大目付中迄相顧、御用番る可及差図候、見世物芝居有之候間、右之用事相仕廻候へ、早速可被罷歸候、目付之者差出候間、見合次第ニ急度被仰付候（中略）足輕、中間、又ものニ至迄不參候様可被申付候

『国元日記』（津山郷土館所蔵）享保五年四月十九日  
この種の触は宮地芝居に際しても出されているが、実際には如何ほど守られたか疑問である。

⑧ 文化十五年願書を差出さずして他所芝居を興行し、町役より差留めを命じられたにも拘らず強行したため、元方の美濃屋利兵衛は過料二貫文、五日追込みの処分をうけたのをはじめ関係したものはいずれも追込三〜五日の処分とされている（『国元日記』文化十五年二月晦日）。

⑨ 『町奉行日記』は宝暦四年以降が現存し、年次により記事に精粗がある。『町奉行日記』の欠年分については『国元日記』、『日記書拔』の記事により補った。これら日記を欠く年次は、宝暦十一年、天明八年であり、それ以外表にみえない年次には記録上は他所芝居がないといえる。とくに天明期に他所芝居が少ないが、これは一宮市町において天明五年まで輕業、芝居にいたるまで差し止めたことによる（『国元日記』天明五年三月十四日）。

⑩ 庵造巖「文政八年版『諸国芝居繁栄数望』について」（『芸能史研究』第二〇号）。

⑪ 『龍野市史』第二卷（昭和五十六年）四五五頁。

⑫ 朝倉無声『見世物研究』（昭和三年）八九頁。

⑬ 同書一九一〜一九七頁。

⑭ 『日記』寛政十二年三月二十八日。

⑮ 『日記』寛政十年二月十三日。

⑯ 『日記』文政十年六月三日。

⑰ 『日記』天保十年六月二十三日。

⑱ 『日記』天保七年一月二十二日。

⑲ 『日記』天保七年三月七日。

⑳ 『日記』天保七年六月三日。

㉑ 「仕法書」は大変興味ある内容で、地方興行の諸経費を考える上で参考になる史料であるので紹介しておきたい。なお本史料は龍野市史編集のために蒐集された史料である。

#### 乍恐奉願上候口上

一 今度厚御慈悲を以町方賑く敷相成候様被仰出、雖有仕合広太至極奉存候、右ニ付春秋両度於当所川原躍狂言興行御免被成候へ、諸方る見物多入来り、町方諸商人賑く敷、別而興行中前後其筋相免日雇商人所く益不少、興行人ハ度々ニ申談し五人、七人相組興行仕候得へ、其益ニ而米麦高直之中ニも露命取統凌易奉存候、右興行ニ付町方失墜無之様心配仕法立工風仕、別紙ニ認奉差上候、右之通仕法相極候得へ、当所之金銀ハ減し不申、他所る入込候金銀、町方諸商人之利益ハ不少、当所之潤ひと相成可申奉存候、右之段御免被為成下候へ、興行人ハ不及申上、町方一統之

繁榮奉存候、偏ニ御願之趣御免被爲成下候ハ、広太之御意  
甚難有仕合奉存候

天保七年八月

発起人 綱干屋儀助

五人組頭 あかしや忠右衛門

興行仕法

晴天五日之積 但右之分ハ秋之仕法、春ハ売買ニ相違御

座候

役者給銀一日分 百五拾匁として五日分 七百五拾匁

小屋借物損料 凡五日分高 三百五拾匁

興行中前後十五日分日雇六人卷会二匁ツ、百八拾匁

役者座中之人数凡三拾人之宿賃 一人分一匁五分として

一日四拾五匁ツ、五日分 貳百廿五匁

舞台道具立 画師其外日々借道具五日分 百匁

らうそく、油 一日分二十匁として五日分 百匁

役者荷物むかひ送り入用 百匁

興行五日中雨天五日として役者宿賃 二百廿五匁

御役方様御出張入用 凡五日分ニ而 百五拾匁

興行前後付届世話ニ相成候方へ遣ひ物 百匁

座中之者へ遣申ひん付・元結たぐひ五日中 凡二拾五匁

役者化粧料 一日拾匁ツ、五日分 五拾匁

興行中売物木札捨 五拾匁

風呂場栗かし薪五日分 拾匁

合 貳貫四百拾五匁

入用之分右之通ニ御座候

勘定覚 左之通ニ御座候

御城下 北龍野村、樋山村、小神村、日銅村右人分凡千五

百人と積り、五日之間売切札二匁宛毎日持参之積り、二人

合ニ木札一枚ニ御座候

五日之内此高 三貫匁

小児之分千人と積り興行五日之間、七分五厘売切相渡 此

高 三百五拾匁

他所人ハ卷匁ツ、但し此分是迄通一日切之積ニ御座候

小商売渡し候之積

中座売渡 五日分 但し疊付之事ニ御座候 四百匁

重箱三重 大六匁 中一朱 小三匁

作り身一鉢 大四匁 中三匁 小二匁

酒一本 三合入 一匁

鮓一鉢 大三匁 中二匁 小一匁五分

田菜一鉢 大一匁 中錢六匁 小四八匁

割籠弁当 八分

② 『日記』嘉永三年四月二十九日。

③ 玉置家文書（津山郷土館寄託）。

④ 名生昭雄「播州高室芝居の発展」（『芸能史研究』第三五号

四九頁）。

⑤ 薄田太郎 薄田純一郎『宮島歌舞伎年代記』（昭和五十年）

六六、八六頁。

- ②⑥ 『旧金毘羅大芝居<sup>變工</sup>復元記念論攷』(昭和五十一年)二二頁。
- ②⑦ 「大歌舞妓外題年鑑」(『浪速叢書』第一五 昭和五年)。
- ②⑧ 「摂陽奇観」卷四八(『浪速叢書』第六 昭和四年)一七五頁。
- ②⑨ 『日本庶民文化史料集成』第六巻歌舞伎(一九七三年)一七頁。
- ③① 『日記』天保七年七月五日。
- ③② 『日記』天保九年五月二十二日。
- ③③ 『日記』天保七年八月三日。
- ③④ 拙稿「天保期津山城下の景況」(『橋茂先生古稀記念論文集』昭和五十五年)。
- ③⑤ 『日記』天保七年八月三日。
- ③⑥ 拙稿「津山藩における家業督促策」(『水野恭一郎先生頌寿記念 日本宗教社会史論叢』昭和五十七年)。
- ③⑦ 『日記』天保八年四月二十一日。

付記 史料閲覧については市立津山郷土館のご好意を得た。記して謝意を表する。